

# Juvenal を通して Fielding を読む

## ——第6 諷刺に関する比較文学的考察——

南 井 正 廣

### I

Henry Fielding の “Part of *Juvenal's* Sixth Satire, Modernized in BURLESQUE VERSE”<sup>1</sup> は、全体で451行の小品である。タイトルからもわかるように、ローマの諷刺詩人 Juvenal の第6 諷刺をベースにして、舞台を英国に置き換え、18世紀版として仕上げている。女性を諷した第6 諷刺の現代版を作ったのだから、Fielding の執筆動機が女性に絡むものであったことは容易に想像されうる。Fielding 自身の告白によると、20歳になる前に失恋の腹いせに書いたものらしい。<sup>2</sup> Fielding は Lyme Regis という町で Sarah Andrew 嬢に恋をしたのだが、彼女の後見人 Andrew Tucker の妨害に遭って成就せず、その間に暴漢に襲われたり、Sarah 嬢を誘拐しようとしたりしたが、結局「Andrew Tucker とその息子は弱虫の臆病者」という貼紙を出して、その町を去ることを余儀なくされたというエピソードが残っている。<sup>3</sup> 暴漢 (Joseph Channon) に襲われたのが1725年であるから、執筆時期はその直後と考えられる。従って、この作品は、Fielding の実在する最も初期の習作ということになるのだが、残念ながら現在読者が目にすることができるのは、かなり加筆修正が施されて、1743年に出版された *Miscellanies* の第1巻に収められているものに限られる。Fielding が1725年の時点で Juvenal の原詩の何行めまでをスケッチしたのか、どの程度モダナイズしたのかは、今となっては知る由もない。

しかし、1743年版にはそれ独自の面白さがある。男女を問わず同時代の人々を実名で登場させて読者の笑いを誘っているし、Fielding 自身がユーモラスな註も付けている。テキストは、左のページにラテン語の原詩が、右のページに Fielding の英詩が対応する形で配置されていて、原詩を Fielding が如何に料理しているのかを見るのも楽しい。ただ、一つ奇妙なことがある。作品のタイトルに付いている“Part”という語が示しているように、*Modernization* は部分訳と思われる。事実、661行ある原詩の299行の所で、突然終わっている。「突然」と断ったのは、Fielding がテキストとして採用した“Delphin edition”ではパラグラフの切れ目になっていない所で Fielding が筆を置いているからである。もちろん、ラテン語の写本自体にはパンクチュエーションや段落分けなど存在しないのだから、関係ないと言えばそれまでである。しかし、それぞれの版はその編者自身の解釈に基づいて符号が付けられたり、字下げが行なわれたりしているのだから、Fielding としては“Delphin edition”をテキストとして採用している以上、その形式を無視する訳にはいかなかったはずだ。実際、原詩にはインデントされた箇所が11あり、Fielding が従っていないのは1箇所だけに止まっている。にもかかわらず、*Miscellanies* に掲載されている原詩と *Modernization* の最終行を比較してみると、原詩の方は“Divitiæ molles. — (v. 299)”とピリオドにダッシュが加わった形で中断を表しているのに対し、*Modernization* の方は“Bear off the Virtues of the Isle. (1. 451)”という具合にフルストップが置かれている。これは、Fielding が *Modernization* を部分的な翻案ではなく、一つの独立した作品と見做していたことを示す証拠と考えられるだろう。が、他人の作品をベースに据えながら自分の作品を組み立て、しかも途中で投げ出しておいて完成品と見做すという芸当はなかなか理解しがたい。この問題はどのように解決されるべきなのであろうか。

Fielding が Juvenal の原詩の299行で作業を停止したことには、二通りの考え方が想定される。Fielding の作業停止を最も積極的に評価した場合、

彼にはそこでモダナイズを止めるべき何らかの意図があったということになるし、最も消極的に評価した場合、ただ単に退屈して途中で投げ出したということになる。もちろん、どちらであるのかは永遠の謎である。が、どちらであるにせよ、Fielding が299行で終わらせているという事実は揺るがないのだから、原詩の299行の途中が Fielding の着陸（不時着）地点として好都合であったことさえわかれば問題はないはずだ。仮に不時着であったにしても、適当な地点を選んで作品としての格好を整えなければ、作品として世間に公表できないであろうから。Fielding は何をどう選んで、どう利用したのだろうか。当然のことながら、Juvenal の原詩を絶えず意識しながら、議論が展開していくことになる。

## II

まず、Fielding の弁明に耳を傾けてみよう。彼は *Modernization* の最終ページの註で、“We shall here close our Translation of this satire; for as the Remainder is in many Places too obscene for chaste Ears; so, to the Honour of the *English Ladies*, the *Latin* by no Means applicable to them, nor indeed capable of being modernized”<sup>4</sup> という発言を残して、Juvenal の第6諷刺の現代版作成を中断している。この断り書きを素直に受け入れてよいのかどうかは難しい。Juvenal は“four-letter word”そのものを原詩の中で用いることはなかったが、<sup>5</sup> 確かに、原詩の300行目から341行目までは、第6諷刺の中でも、とりわけ卑猥な表現の多い部分といえる。1693年に第6諷刺の英語訳（意識ではあるがほぼ原詩に近い<sup>6</sup>）を発表したDrydenですら、この箇所を卑猥な語を使わずソフトな調子に変えて訳しているほどである。<sup>7</sup> しかしながら、Fielding が299行目の途中で訳出を停止した真の理由を卑猥という点のみに帰そうとする態度には疑義がないでもない。猥雑な描写は300行目以降でしか見られぬものではない。Fielding がモダナイズした299行目までのところにも、かなり猥雑な表現がある。例えば、

Claudius 帝の妃 Messalina が高貴な売春婦として夜な夜な淫売宿に現われるという箇所などは、相当なものだ。

Et nigrum flavo crinen abscondente galero,  
 Intravit calidum veteri centone lupanar,  
 Et cellam vacuum, atque suam: tunc nuda papillis  
 Constitit auratis, titulum mentita Lyciscæ,  
 Ostenditque tuum, generose Britannice, ventrem.  
 Excepit blanda intrantes, atque æra poposcit.  
 Mox, lenone suas jam dimittente puellas,  
 Tristis abit; sed, quod potuit, tamen ultima cellam  
 Clausit, adhuc ardens rigidæ tentigine vulvæ;  
 Et lassata viris, nondum satiata recessit: (vv.120-129)

メッサリーナは、ブロードの鬘で黒髪を隠して、使い古しのカーテンを通して、暑苦しい売春宿の彼女のために取ってある空き部屋に入った。それから、乳首を剥き出しにして、金箔を塗り、リュキスカという通名で、生まれのよいブリタニクスよ、汝を産んだ子宮を晒したのだ。愛敬のある顔をして、入ってくる者たちを捕まえては、金をせびったのだ。やがて、宿の主人が娼婦たちを帰す時、彼女は浮かぬ顔をして立ち去った。が、出来る限り最後に部屋を閉めたのだ。いまだに、ドロドロになっている下腹を熱くしたままで。男のせいで疲れてはいるものの、いまだに満足することなく去っていったのだ。(下線及び訳は筆者)

ラテン語の性表現の大家 J. N. Adams の研究に沿って下線を施した語について解説しておこう。“venter”という語は“womb”を表す日常語で、口語的あるいは卑俗な作品で用いられるので常である。“vulva”の方は、元来動物の“womb”を意味する語で、それが人間のその部分を意味するようになり、しばしば女性性器そのものをも含めた意味を帯びる傾向があったらしい。この語は、高雅な詩や形式ばった散文では決して用いられず、庶民の言葉を利用するエピグラムや諷刺詩に限って使われていた。<sup>8</sup> こういった語彙を含

んだきわめて猥褻度の高い詩を、Fielding は“Harry’s Wife” (Henry VIII の妻を想定) を主語に据えて次のようにモダンイズしている。

And with a *Capuchin* upon her,  
Which hid her black and lovely Hairs;  
At H—d’s softly stole up Stairs:  
There at Receipt of Custom sitting,  
She boldly call’d herself the *Kitten*;  
Smil’d, and pretended to be needy,  
And ask’d Men to *come down the Ready*.  
But when for Fear of Justice’ Warrants,  
The Bawd dismiss’d her Whores on Errands,  
She staid the last—then went, they say,  
Unsatisfy’d, tho’ tir’d, away. (11. 189-199)

“H—d’s” は18世紀当時 コベント・ガーデンにあった売春宿の名前で、Harry’s Wife はそこに出入りして金を稼いでいた。治安判事の手入れの際にも、最後までねばっていた。問題の語彙は跡形もなく取り除かれ、“Unsatisfy’d” という一語で処理されている。この他にも、「妻を娶るくらいなら、少年を愛する方がましだ (vv. 33-7)」という表現や、声のよい喜劇役者が着けていた男性貞操帯 (vv. 73-4) (ローマ時代セックスをすると声ができなくなると信じられていた)、さらには女性用便器 (v. 263) という語彙を削除している。また、表現を穏やかにしている所が他にも五箇所もある。<sup>9</sup>

このような創作態度に、*Miscellanies* の序文で述べている女性に対する同情<sup>10</sup> を合わせて考えれば、先に挙げた Fielding の弁明にも説得力が出てくる。しかしながら、彼の弁明を絶対的なものとして受け入れることのできない事情も、依然として存在する。原詩の300行目から341行目までと Messalina の引用箇所とを比べた場合、猥褻度がどの程度高いのかを正確に判定することは困難である。猥褻表現を巧みに避けてモダンイズすることに成功している Fielding の技量から判断すれば、Juvenal の314行以下の Bona Dea

の秘儀などは、当時流行していたマスカレードの仕掛人であった ‘Count Heydegger’<sup>11</sup> を祭司に見立てて表現することもできたであろう。さらに、  
 “Whatever his [Juvenal’s] Roman Ladies were, the English are free from all his Imputations. . . . which [the Argument of the Satyr] is no way relating to them.”<sup>12</sup> と主張しながらも、同時代の英国女性及び、一般的な女性全体を視野に入れて訳詩を作成していた節の見受けられる Dryden の例がある。<sup>13</sup> 最後に、諷刺にまつわるパラドックスにも言及しておく必要がある。告発の度が過ぎれば、それだけ読者に訴える力が弱まる。例えば、Felicity A. Nussbaum は Juvenal の諷刺の危険性を踏まえた Dryden の翻訳態度を次のように評している。

The satire is so extreme, so exaggerated . . . that it sometimes creates considerable distance between the reader and the satiric voice. In the argument, Dryden maintains that he translates the satire precisely *because* it lacks persuasive power. . . . Some more recent critics of Juvenal agree that the satirist’s voice is almost hysterically irrational and suggest that his delight in describing the drunken and sadistic orgies of whoring women indicates that he intentionally undermined his own apparent antifeminism.<sup>14</sup>

Juvenal は第1 諷刺において、“facit indignatio uersum (怒りが詩を作らせる)”<sup>15</sup> と言明している。そして、この怒りに関して Juvenal とほぼ同時代に生きたストアの哲人 Seneca は、「憎しみの衝動に駆り立てられ、武器や流血や拷問を好み、他人に危害を加えている間に自分を見失い、相手の合口にも飛びかかり復讐を遂げさせようとして、復讐者をも引きずり回す」<sup>16</sup> と表明しているが、この見解が Juvenal の怒りにも当てはまる。つまり、怒りに振り回され攻撃に専心し過ぎて、攻撃の妥当性、限度を越えてしまうということだ。このことを逆手にとると、引用文中の “the drunken and sadistic orgies of whoring women” は、まさしく原詩の300行以下の部分

を指しているので、この部分をより穏やかな表現に改める、もしくは、削除することによって、諷刺家の冷静な姿勢が保証され、却って攻撃の刃が鋭くなることもありうることになる。

Fielding の弁明は、モダナイズという作業停止に関する、本人自身の唯一の発言であるから、もちろん尊重されるべきである。けれども、それを絶対視するのはやめよう。ひょっとしたら、Fielding の心の中に上述したような皮肉めいた発想があったかもしれないし、あるいは、ただ単なる作業停止のための口実であったかもしれないから。ここでは、Fielding が299行目でペンを置いたという事実のみ注目し、彼の理由付けは一応考慮に入れておく程度でいいだろう。

### III

次に、Fielding がその弁明において本音を語っていない場合を想定してみよう。もちろん、Juvenal の原詩の300行以降が退屈で単調だから Fielding が訳出を中止したという考え方が有力となろう。が、この見解は証明段階で行き詰まる。第6諷刺の後半が精彩を欠くと指摘している欧米の古典学者はいないし、Fielding のメンタルな面に問題があるのだとすれば、事の真相は迷宮入りしかねない。よって、退屈説はベンディングにしておき、本章では逆の観点から論を進めていく。つまり、300行以降にも Fielding の関心を十分に引き付ける内容があり、訳出を止めたのは何らかの意図があったのことだという仮定が成り立つか否かの確認作業を行なってみる。

Fielding が関心を抱いていたと想定される情報を、第6諷刺の300行目以降に見いだす作業から取りかかろう。ここでは、あくまでも可能性の有無を調べるのが目的であるから、Fielding が得意としていて、小説の中でしばしば用いているモチーフに連なる一節が原詩の中に存在することだけが確認できればよい。そういう目で原詩の後半部分を読んでいくと、“learned women” の描写 (vv. 434-456) に突き当たる。少し、原詩を覗いてみよう。

illa tamen grauior, quae cum discumbere coepit  
laudat Vergilium, periturae ignoscit Elissae,  
committit uates et comparat, inde Maronem  
atque alia parte in trutina suspendit Homerum.  
cedunt grammatici, uincuntur rhetores, omnis  
turba tacet, nec cauidicus nec praeco loquetur,  
altera nec mulier. ...<sup>17</sup>

しかし、最も我慢のならないのは、食卓につくとすぐにウェルギリウスを褒めそやし、死のうとしているディードー（エリッサ）を許し、片方の天秤皿にウェルギリウス（マロー）を、そしてもう一方の皿にホメロスを置いて、判断の基準にしている女だ。古典教師たちも彼女に屈するし、修辞学者も打ち負かされる。一座の者が黙ってしまい、法律家も競買人も口を開こうとしない。（訳は筆者）

遠くは西洋古典文学の題材であり、近い所ではフランスの劇作家 Molière (Fielding 自身 Molière のいくつかの作品から翻案を試みている<sup>18</sup>) が題材として利用している、あの文学的遺産がここにある。Fielding も、Jenny Jones, Mrs. Western, そして Mrs. Atkinson という形で、学問のある女性を描いているが、そのモチーフの原型をここに見る思いがする。Fielding はこの原型をそのまま用いることはしていない。学問のある女性と道徳の問題、妻の方が学識がある場合の夫婦関係、古典の知識と人間としての聡明さの違い、といった諸問題にからめて、“learned women” を描いている。小論には、そういった大きな問題に割くスペースがないので、“learned women” を描く際の、Fielding の凝り加減のみに注目してみよう。

*Amelia* において、Dr. Harrison が Homer の原文を語りだした時に、ラテン語の素養はあるがギリシャ語は理解できない Mrs. Atkinson は、“I have no Greek ears, sir ... I believe I could understand it in the Delphin Homer”<sup>19</sup> と答える。一見、何でもない受け答えに見える。が、“Delphin edition” の意味が解れば、Fielding の老獪さが浮かび上がる。



“Delphin edition”は「皇太子御用」という名目のもとに、Louis XIV の息子の教育のために編集されたテキストで、ラテン語のパラフレイズと註とが付いていた。問題はこのテキストはラテン文学の古典のみを扱っていたということである。<sup>20</sup> 従って、Mrs. Atkinson の言及しているような“Delphin Homer”なる書物は存在しないことになる。Fielding も Dryden も訳出の際の底本として利用していたこと、1684年にパリで初版が出され、19世紀になるまでに少なくとも18回は版を重ねたことから判断すると、Mrs. Atkinson は当時の教養ある人士なら当然知っているはずのことを知らないでいることになる。Fielding はさらに、その直後の箇所、彼女の無知を知っている Dr. Harrison に“Delphin Aristotle”や“Delphin Edition of this News Paper”<sup>21</sup> という表現を使わせて、読者を笑わせようとしているのだから、相当意地が悪い。Fielding はどちらかといえば、“learned women”を穏やかに扱ったという指摘もあるが、<sup>22</sup> 上述の引用を見る限り、なかなか辛辣である。むしろ、辛辣に攻撃しながらも、決して悪者扱いせぬ所、Mrs. Atkinson にも良い特質を備えさせて、Amelia とは対照的な女性像を提示してくれている所に、Fielding の真骨頂があると考えたい。<sup>23</sup>

このように、学識のある女性を巧みに描写している Fielding の念頭に、Juvenal の雛型が——もちろん、彼以外の作家の影響もあるだろうが——あったことは間違いないだろう。この他にも、Swift の“The Lady’s Dressing Room”を彷彿させるような化粧の場面（OCT, vv. 457-511）や、贅沢で浪費癖のある女（OCT, vv. 352-365）の描写など、Fielding が興味を持って読んでいそうな箇所がいくつかある。従って、彼が第6諷刺の300行目以降に退屈していたと即断するのは禁物である。無論、退屈して訳出を止めたという可能性も否定しきれないが。

結局の所、Fielding が原詩の299行目で作業を停止した理由に関しては、三つの可能性が考えられる。一つは、300行目以降が卑猥過ぎるから訳出できないという彼の主張をストレートに受け止めること。今一つは、300行目

以降の内容が彼には退屈であったので、あるいは、ただ単に作業に疲れて（飽きて）訳出を止めたというケース。三番目は、何らかの意図があって訳出を中止したケース。二番目と三番目の場合、彼の断り書きは単なる口実になってしまう。これまでの、議論から明らかなように、いずれも推理の域でないもので、否定も肯定もできない。しかし、諦める必要はない。たとえ、正解が三つの内のどれであっても、彼が299行目でペンを置いたことには変わりがない。理由が何であれ、Fielding が見切りをつけるのに好都合であった事情が、原詩の299行付近に存在することが証明できれば、この作品の謎が明らかになるはずだから。そのために、Juvenal の原詩の構造そのものの検討に入る必要が出てきた。

#### IV

Juvenal の第6 諷刺の構造に関しては、Gilbert Highet の総合的研究<sup>24</sup> が役立つ。彼は自らの見解を披露しているだけでなく、他の3名の研究者の説も紹介してくれているからである。ここでは、さらに2名の研究者の結論も提示して、Fielding が依拠している“Delphin edition”が切れ目としていない部分が切れ目になりうることを実証しておこう。まずは、作品の意味内容は度外視して、次の表（数字はすべて行数を表し、それぞれの研究者が何行目から何行目までを段落と見做しているのかを示している）をご覧頂きたい。

Highet	Birt	Vianello	Nägelsbach	Anderson	Coffey
1-132	1-132	1-285	1-285	1-20	1-20
136-285	136-345	286-378	286-300	21-285	:
286-351	346-591	379-473	300-661	286-300	286-300
352-661	592-661	474-591		301-641	:
		592-661		642-661	:

25

因みに、“Delphin edition”の方で、インデントされている行は、1行目、

60行目, 81行目, 135行目, 141行目, 160行目, 171行目, 199行目, 241行目, 245行目, 267行目 (Fielding が訳出している299行目までについては) であって, 区切り方にかなりムラがあるように思われる。まず最初に気が付くのは, 285行目と286行目の間に切れ目を置く研究者が6人中5人もいること, さらに286行目から300行目までを一段落と見做す者が3名いるということである。何も多数決で事柄が決する訳ではないが, このデータを参考にすると, 286行目から300行目のあたりに何かがありそうに思える。

Fielding が *Modernization* のペンを置いたのが299行目であるので, 問題箇所から至近距離の所で彼が脱稿したと思われるだろう。が, これは間違い。OCT を始めとするほとんどの版には, ブラケット付きではあるが, 126行目が掲載されているのに, 彼の使用した“Delphin edition”には126行目が含まれていない。<sup>26</sup> つまり, Fielding が見切った地点は現代のテキストでは, 300行目の途中ということになり, 案外 Fielding が現代の古典学者たちと同じパターンの読みをしていたのではないかと思えてくる。いよいよ, 問題の部分で語られている内容の検討に入ろう。

Unde hæc monstra tamen, vel quo de fonte requiris?  
 Præstabat castas humilis fortuna Latinas  
 Quondam, nec vitiis contingi parva sinebat  
 Tecta labor, somnique breves, et vellere Thusco  
 Vexatæ duræque manus, ac proximus urbi  
 Hannibal, et stantes Collina in turre mariti.  
 Nunc patimur longæ pacis mala: sævior armis  
 Luxuria incubuit, victumque ulciscitur orbem.  
 Nullum crimen abest, facinusque libidinis, ex quo  
 Paupertas Romana perit: hinc fluxit ad istos  
 Et Sybaris colles, hinc et Rhodos, atque Miletoes,  
 Atque coronatum, et petulans, madidumque Tarentum.  
 Prima peregrinos obscœna pecunia mores  
 Intulit, et turpi fregerunt secula luxu

Divitiæ molles. — (vv. 285-299)

しかし、こういったもの凄いのことが、どこから、こういった源から生じるのかと君は尋ねる。かつては、ラティウムの人たちにはあまり財がなかったもので、道徳的には清らかであった。自分たちの小さな家が悪徳に染まることを許さなかったのは、彼女らの労働であり、短い睡眠時間であり、トスカーナの羊毛のせいで辛酸をなめ尽くした手であり、またローマの近くにまで迫ってきたハンニバルであり、コリーヌスの城砦に立って（迎撃しようとして）いる夫たちであった。今や我々は長い平和によって齎された悪を経験し、武器よりもなお恐ろしい奢侈がのしかかってきて、征服された国々のために恨みを晴らしている。ローマの貧困が無くなって以来、犯罪やら淫らな情欲に満ちた行為が欠けたことがない。その時から、これら（7つ）の大きな丘に、シュパリス、ロドス、ミーレトスが、そして、花輪を戴き、酒に酔った、厚顔のタレントゥムが流れ込んできた。邪な富というもの異国の習慣を初めて齎らし、ひどい奢侈によって柔弱なる富が数世代の人々を衰弱させるのだ。（訳は筆者）

引用から明らかなように、この部分は具体的に女性を描写しているのではなく、既述の事柄の原因を解説している。既述の事柄とは、先に述べた Messalina のような女性（王妃でありながら夜な夜な売春窟に出入りする）をその一例と考えて置けばよい。となると、もし、Juvenal がしっかりと作品構成をしているのなら、あるいは、たとえそうでなくても、（いきなり具体例を列挙し始めるようでは作品の展開上不自然であるから）、どこかで何らかの問題提起がなされているはずである。第6諷刺を眺めると、Juvenal が真っ先に問題提起を行なっていることがわかる。少し長いが、これからの議論に欠かせぬ内容であるので、見ておこう。

Credo pudicitiam Saturno rege moratam  
In terris, visamque diu; cum frigida parvas  
Præberet spelunca domos, ignemque, Laremque,  
Et pecus, et dominos communi clauderet umbra:

Silvestrem montana torum cum sterneret uxor  
 Frondibus et culmo, vicinarumque ferarum  
 Pellibus, haud similis tibi, Cynthia, nec tibi, cujus  
 Turbavit nitidos extinctus passer ocella;  
 Sed potanda ferens infantibus ubera magnis,  
 Et sæpe horridior glandem ructante marito.  
 Quippe aliter tunc orbe novo, cœloque recenti  
 Vivebant homines; qui rupto robore nati,  
 Compositique luto nullos habuere parentes.  
 Multa pudicitæ veteris vestigia forsan,  
 Aut aliqua extiterant, et sub Jove, sed Jove nondum  
 Barbato, nondum Græcis jurare paratis  
 Per caput alterius; cum furem nemo timeret  
 Caulibus, aut pomis, sed aperto viveret horto.  
 Paulatim deinde ad superos Astræa recessit  
 Hac comite; atque duæ pariter fugere sorores. (vv. 1-20)

サトゥルスが王であった頃、貞潔の女神はまだ地上で細々と生き長らえていて、しばしの間、目にすることができたと思う。それは、人が凍てつくような洞穴を小さな家としていて、暖をとる火も一家の守護神も家畜たちも主人も（洞穴の）一つ屋根の下に一緒に詰め込まれていた時のことで、山育ちの妻は葉や藁で、あるいはその隣人である獣の皮で森の寝床を作っていた。キュンティアよ、おまえには少しも似ていない、また雀が死んでその輝かしい麗しい瞳を曇らせた人（レスビア）よ、おまえにも似ていない、その（山育ちの）女は、背が高くがっちりした赤子に乳をやり、団栗のおくびを出す夫より、しばしば毛むくじゃらであった。確かに、その当時、世界は若かったし、空も新しかった。人々は（今とは）違った生活をしていた。その人たちは引き裂かれた樫の木から生まれたり、土からできていたりで、親は持たなかった。おそらく、ユピテルの支配の下でさえ、昔の貞潔の多くが、または、いくらかなりが、見受けられた。が、その頃は当のユピテルはまだ髭を生やしてなどいなかったし、ギリシャ人たちはまだ、他人の頭にかけて誓いごとをす

ることなど知らなかったのだ。キャベツや果樹園の果物を盗む泥棒を恐れるものもいなかったし、庭に囲いなどせずに暮らしていた。それから、アストライアー（正義の女神）が貞潔の女神を道連れにして、ゆっくりと天上の世界に戻ったのだ。つまり二人の女神は共に逃げ去ったのだろう。（訳は筆者）

第6諷刺の冒頭の20行である。この部分では、貞潔の女神（Pudicitia）が黄金時代、人間がまだ原始的な生活を営んでいた頃には、存在したのに、いつしかいなくなってしまったという主旨のことが述べられている。このすぐ後で、「銀の時代に姦通が始まった（v. 24）」という件があることから、黄金時代に地上に存在した貞潔の女神の消失という問題がここで提起され、それからローマの墮落した女性たちがドラマチックに語られることになるのがわかる。第6諷刺の中で実例が描写されずに一般論が展開されているのは、この最初の20行と先ほど取り上げた285行目から299行目までの部分だけである。従って、この双方が問題提起とその原因の説明という形で連動し合っていることに異存はあるまい。

そうすると、私の分析が先ほどの表の、William S. Anderson のそれにほぼ一致することになる。Highet や Vianello は、それぞれ286-351行や286-378行を一つのパラグラフと見做していたが、300行目の半ばから、酒に酔ったり、淫らな秘儀を行なう具体的な女性像が描かれているので、大筋において下に示した Anderson の区切り案が正しいことになる。

Prologue	(1-20)
Part I	(21-285)
Epilogue & Prologue	(286-300)
Part II	(301-641)
Epilogue	(642-661)

N.B. 意味を厳密に分析すると、300行目の途中に切れ目があると考えほうが自然であるが。

Anderson は、他の批評家と違って、第6諷刺の構造を議論する際に、フレーム<sup>27</sup>なるものを念頭に置いている。彼によれば、諷刺はプロローグとでも

言うべき序文と結論を述べる部分（エピローグ）という枠組みを持ち、その枠内で本体となる個々の事例が提示されていくことになる。この考え方には基本的には賛成であるが、Juvenal のこの作品全体に当てはめようとする、少し息苦しくなる。Anderson の議論を追っていくと、最初のプロローグでは“Pudicitia（貞潔の女神）”の消失が述べられ、Part I 全体が節操のない女性の描写で固められている。286行目から300行目までは、女性が“Pudicitia”を喪失した原因が“Luxuria（奢侈）”と指摘され、さらに、この部分が Part II のプロローグとなって、Part II では“Luxuria”が世の女性たちを席卷している様が描かれ、エピローグで締め括るという具合になる。だが、そうは読めない。何故なら、Part I や Part II で紹介されているすべての話題が、“Pudicitia”や“Luxuria”に関わっているとはとても思えないからだ。Anderson 自身がキーワード扱いしている、“pudicitia”, “pudor”, “pudicus” また、“luxuria”, “luxus” という語が頻出しているどころか、散見されるに止まっていることから、彼の論旨に少し無理があることが理解できよう。さらに、642行目から始まると主張されているエピローグについてはとうてい肯定しえない。スペースの関係で引用は控えるが、600行目あたりから、娼業や毒薬を弄して亭主を廃人にする女性、継子殺しをする女性、財産目当てで実子をも殺す女性、夫や子供を毒殺する女性が次々と舞台上に登場する。つまり、音楽用語でいうクレッシェンドが用いられているかのように、悪女の例が徐々に極端になって行き、ピークに達したところで終わっているという感じなのだ。そこでは、一般論や教訓が明示されているというよりは、Highet の指摘しているような、クライマックスが形成されている<sup>28</sup>と読む方が妥当であろう。問題は Juvenal が結論を述べずに作品を終わらせていることなのである。

Anderson の説が挫折するとなると、すべてが暗礁に乗り上げてしまうかということ、そうでもない。あまりにも、リジッドに構造分析をしようとする姿勢を少し改めさえすればいいのだ。そのために、構造分析など無意味だと

称する批判家の意見を拝聴しよう。例えば、Alvin Kernan は第3諷刺を検証する際に、Juvenal の手法はカメラ・アイの手法であると主張している。それは、ローマの辻々で立ち止まってその場その場の光景をカメラに収めていくやり方で、<sup>29</sup> これこそが“formal satire”の特徴であると彼は論じている。また、先ほどの表で紹介した、Michael Coffey もカタログ形式で女性攻撃をするやり方は、ギリシャの詩人 Semonides 以来の手法なので、構造分析は不可能だと指摘している。<sup>30</sup> そして、もう少し冷静に（意地悪く）Juvenal を見る方法もある。Peter Green の考えがそれで、彼は“a coherent pattern”を見付けだす試みはすべて失敗に帰しているとは主張し、その原因として Juvenal の集中力が100行以上持続しえないことを挙げている。<sup>31</sup>

これまで論じてきたように、Juvenal の661行の中には、具体的な女性描写の部分と、一般的見解を吐露している部分（2箇所）が存在している。Kernan や Coffey の読み方は前者のみを対象としたものであるから、正しくない。が、Green の指摘は面白い。100行を越えると、コンテキストにあまり縛られない自由な連想が侵入してくるということが、Juvenal の場合日常茶飯事であるらしい。となると、あまり厳密に枠に入れようとすると、却って足を掬われかねない。かといって、一般的見解を述べている部分を完全に無視する訳にも行かない。それで、Anderson の提案したフレームを緩やかに活かしながら、Green の発言も視野に入れた構造分析を、この件に関する結論として提示しておこう。

Prologue (1-20): Pudicitia の消失を紹介

Part I (21-285): Pudicitia を喪失した女性像を中心に例示

Epilogue & Prologue: Pudicitia が無くなった原因 (Luxuria) の提示  
(286-300の途中)

Part II (300の途中-661): 墮落した女性像を首尾一貫せずに例示  
(Luxuria の席卷の例も含まれる)

N.B. この分析の行数は OCT に基づく。Delphin 版によれば、126行目以降が1行ずれる。

こうすれば、第6諷刺に見受けられる二種類の文体の問題も、Juvenal の



脱線の問題も解決する。第6諷刺の構造について長々と論じてきたが、決して道草を喰っていた訳ではない。Fielding が訳出を開始したのは、もちろん第1行目から。そして、止めたのが300行目（Delphin 版では299行目）の途中。となれば、彼が意識的であれ、無意識的であれ、この基本構造を利用したという見方が十分に成り立つ訳だ。よって、Fielding がこの区切りに執着した理由は何か、また、それに伴ってどのような問題が発生するに至ったのか。その二点がこれからの議論の中心となる。

## V

Fielding に関する検討に入る前に、第6諷刺の冒頭の部分と、第1部の結論部分（286-300の途中）とで、Juvenal が主張していることをまとめておき、またそれが文学史上のどのような場所に置かれるべきモチーフであるのかを整理しておく。その内容が Fielding の独創でも、Juvenal のそれでもないことを明示しておくためである。Juvenal の主旨はおおよそ次のように解釈される。太古の黄金時代には貞潔の女神が地上におられた。ローマの初期の時代というのは、この黄金時代に近い状態で、男も女も貧しかったがよく働き、質素な暮らしをし、外敵から自分たちの国家を守るために、一致団結して戦ったりした。だが、幾多の戦争に勝利を収めて平和が訪れ、外国（とりわけ東方世界の）の汚れた文化、大量の富がローマに流れ込んでくることによって、人々は奢侈を好むようになり、この理想の状態は崩壊した。初期ローマの質素な生活を理想とし、それを無力化させた原因を奢侈にみるという議論は、Juvenal のオリジナルな表現ではなく、彼の同時代の多くの作家が異口同音に口にしている。<sup>92</sup> 例えば、ローマ建国以来の歴史を書き綴った Livy は、

... no state was ever greater, none more righteous or richer in good examples, none ever was where avarice and luxury came into the social order so late, or where humble means and thrift were so

highly esteemed and so long held in honour. For true it is that the less men's wealth was, the less was their greed. Of late, riches have brought in avarice, and excessive pleasures the longing to carry wantonness and licence to the point of ruin for oneself and of universal destruction.<sup>83</sup>

と序文の所で初期ローマへの称賛と、現状への慨嘆を表明している。清貧や儉約を称賛し、奢侈を排撃してローマ初期の共同体を理想化する語り口は、ラテン文学にあっては陳腐な内容だったのだろう。Juvenal に目新しい点があるとすれば、それはローマ共和制の理想時代と黄金時代とをほぼ同一視<sup>84</sup>し、そのそれぞれを冒頭および冒頭に対する結論（最終的な結論は述べられてないが）という形で、連動させている所にあるのだろう。

しかしながら、少し気になる点がある。Juvenal の主旨は上記の議論では言い尽せない面もあるからだ。例えば、「キュンティアよ、おまえには少しも似ていない、また雀が死んでその輝かしい麗しい瞳を曇らせた人（レスビア）よ、おまえにも似ていない、その（山育ちの）女は……団栗のおくびを出す夫よりしばしば毛むくじゃらであった（vv. 7-10）」という描写がプロローグの部分にある。Cynthia はローマ人の抒情詩人 Propertius が詩題にしている美しいが気紛れで不実な娼婦、<sup>85</sup> Lesbia は同じく抒情詩人の Catullus が描いた美しく聡明であるが不道德な女性（情夫 Catullus をお払い箱にしただけでなく、夫を毒殺した疑いもある）<sup>86</sup>で、どちらも見目麗しいものの道徳感覚の欠如した女性であった。が、とにかく彼女らは美しかった。それとは対照的に、黄金時代の貞潔な女性は、毛むくじゃらで優美さに欠け、粗野で下品な感じがする。Anderson の言葉を借りるならば、「（山の）女を何ら魅力を感じさせない粗野で無骨な存在として描き、ローマ時代の優美な女性と対照させて、読者の心に疑義を植え付け、過去を全面的に望ましいものとは確信していない」<sup>87</sup>——アンビヴァレントな姿勢が Juvenal に見受けられることも、忘れてはならない。従って、Juvenal はラテン文学に共通し

た主題を扱い、現世の墮落を嘆き過去を礼賛するという大枠は堅持しながらも、過去の生活に伴う下品で粗野な面への嫌悪感も隠せないでいるという所に落ち着くであろう。

話を Fielding に戻そう。Eton 校に在籍経験があり、オランダの Leyden への留学経験もあり、十分な古典教育を受けたと考えられる Fielding のことだから、ラテン文学のごくありふれた言い回しなどは熟知していたであろう。まず、原詩の Epilogue & Prologue に対応する部分を見てみよう。ラテン文学の伝統的内容は、ねじ曲げられることなく、時代設定だけを変えて、そのまま継承されている。

Whence come these Prodigies? what Fountain,  
 You ask, produces them? I'th' Mountain  
 The *British* Dames were chaste, no Crimes  
 The Cottage stain'd in elder Times;  
 When the laborious Wife slept little,  
 Spun Wool, and boil'd her Husband's Kettle:  
 When the *Armada* frighten'd *Kent*,  
 And good Queen *Bessy* pitch'd her Tent.  
 Now from Security we feel  
 More Ills than threaten'd us from Steel;  
 Severer Luxury abounds,  
 Avenging *France* of all her Wounds.  
 When our old *British* Plainness left us,  
 Of ev'ry Virtue it bereft us:  
 And we've imported from all Climes:  
 All sorts of Wickedness and Crimes:  
*French* Finery, *Italian* Meats,  
 With *German* Drunkenness, *Dutch* Cheats.  
Money's the Source of all our Woes;  
Money! whence Luxury o'erflows,  
 And in a Torrent, like the *Nile*,

Bears off the Virtues of this Isle. (11. 430-451 下線は筆者)

参考までに前章に引用した Juvenal の原詩と比べてみてほしい。Fielding はローマ初期の時代を、スペイン無敵艦隊の接近が英国を震撼せしめたあのエリザベス女王の時代に置き換え、国名を同時代のものに変えてはいるが、基本的な主旨に変わりはない。奢侈に翻弄されているのが、ローマではなく、昨今の英国という話になっているだけに過ぎない。下線部分の位置に注目して頂きたい。10行と離れていない所に、同じ言葉がそれぞれ二度ずつ用いられている。お金が流入してきて、奢侈が流行し、女性たちから品性が失われていく様が強調され、Fielding のこの問題に対する気の入れ方が伝わってくるようだ。パーレスク形式を採っているとはいえ、一応、第6諷刺の18世紀版を作成しているのだから、Fielding が原詩の主旨をそのまま頂戴していても何ら不思議はない。が、これほど力が込められていて、おまけに、この部分で *Modernization* が打ち切られてしまっている。即ち、Fielding 版の第6諷刺の結論部に、この箇所が据えられている。となると、何やら訳があるような気がしてくる。

次に、原詩の冒頭部分に相当する一節を見てみよう。Juvenal が表した黄金時代を、Fielding はどのように扱っているのだろうか。

Dame *Chastity*, without Dispute,  
 Dwelt on the Earth with good King *Brute*;  
 When a cold Hut of Modern *Greenland*  
 Had been a Palace for a Queen *Anne*;  
 When hard and frugal Temp'rance reign'd,  
 And Men no other House contain'd  
 Than the wild Thicket, or the Den;  
 When Houshold Goods, and Beasts, and Men,  
 Together lay beneath one Bough,  
 Which Man and Wife would scarce do now;  
The Rustick Wife her Husband's Bed

With Leaves and Straw, and Beast-Skin made.  
 Not like Miss *Cynthia*, nor that other,  
 Who more bewail'd her Bird than Mother;  
 But fed her Children from her Bubbies,  
 'Till they were grown up to great Loobies:  
 Herself an Ornament less decent  
 Than Spouse, who smelt of Acorn recent.  
 For, in the Infancy of Nature,  
 Man was a diff'rent sort of Creature;  
 When Dirt-engender'd Offspring broke  
 From the ripe Womb of Mother Oak.  
 Ev'n in the Reign of *Jove*, perhaps,  
 The Goddess may have shewn her Chaps;  
 But it was sure in its Beginning,  
 E'er *Jupiter* had Beard to grin in.  
 Not yet the *Greeks* made Truth their Sport,  
 And bore false Evidence in Court;  
 Their Truth was yet become no Adage;  
 Men fear'd no Thieves of Pears and Cabbage.  
 By small Degrees *Astrea* flies  
 With her two Sisters to the Skies. (11.1-32 下線は筆者)

この部分を原詩と比べてみると、Fielding は若干のねじ曲げ（21-22行目と32行目<sup>86</sup>）を行なっているものの、意味内容は大体同じである。下線部分の言葉が示しているように、人は野山で厳しいが節度があり質素な暮らしをしていたと読むことができる。と同時に、原始時代の女性の身体的、外面的な魅力のなさも、ずっと穏やかに表現しているものの、忠実に再現している。彼らがどんなに理想的な暮らしをしようとして、読者にはうっとりするほど魅力的には見えない。さらに、この箇所については、Fielding がモダナイズするためにしばしば行なっている固有名詞の置き換えが、冒頭の三つ（Brute, Greenland, Queen Anne）を除いて全くないことに言及しておか

ねばなるまい。Saturn の代わりにその英国版である Brute が使われていることには納得がいくが、残りの二箇所は荒涼とした世界の言い換えとして Greenland が、女王の言い換えとして不定冠詞付きの Queen Anne がそれぞれ導入されているに過ぎないのだから、さして意味のある置き換えとは見做せない。となると、Fielding はこの冒頭の部分を越えて、50行目まで固有名詞の置き換えを全く行なっていないこと、即ち、原詩をほぼそのまま翻訳していることになる。他の作品と違って、若い頃に書いたものを、出版前に加筆修正したという制作事情から判断すると、何やら意図的な匂いがしないでもない。Fielding が20歳前に書き記した原稿が残っていないため、本当の所はわからない。が、該当部分は、金の時代から、銀の時代、鉄の時代へと時代を下っていくにつれて、姦通やその他の罪が生まれ、結婚するくらいなら自殺したほうがましだという主張がなされている場所。作品全体の問題提起をする箇所である。だから、同時代の人名、地名、エピソードを下手に挿入して笑いをとったり、非難して共感を得ることよりも、これから取り上げる実例がどういう主旨で持ち出されているのかを、読者の心にしっかりと定着させることに重点を置くが故になされた処置と推察されうる。このように、Fielding 流の第6諷刺の冒頭部分は、Juvenal の主旨を活かし、あまり現代的に改めずに理想世界のイメージをひたすら強調することに努めながらも、黄金時代の原始生活に伴う不快感をほのかに漂わせている。つまり、Juvenal の路線を Fielding が堅持していると言えよう。

冒頭と結論部分の双方において、Fielding が Juvenal の原詩の意味内容をほぼ同じように踏襲していることは明らかになった。だが、何故 Fielding は Juvenal の見解をかくも安易に受容しているのだろうか。いや、ただの受け売りではない。Fielding はそれらを自分流の第6諷刺の「起」そして「結」にまで仕立て上げている。何故そこまでしているのだろうか。そこらあたりの事情を探ってみるのも悪くない。さしあたって、彼が理想としていた生活、富や奢侈に対する見解と、Juvenal の第6諷刺で語られているそれら

との距離を調べてみることにする。Fielding の他の作品で語られている、理想の世界や道徳観を突破口にして、答えを読み取ることにしよう。まず、小説が終わる時に、Fielding が主人公たちにどういう暮らしをさせているかに注目してみよう。Tom Jones と Sophia はサマセットシャーのカントリーハウスで暮らすことになっているし、Joseph Andrews と Fanny は父 Wilson に倣って隠遁生活を送る旨のことが書かれている。その隠遁生活とは、田舎屋敷に引っ込んで家族以外の誰とも会わずに自給自足生活することである。Wilson 自身は自らの生活を、“we retired ... from a World full of Bustle, Hatred, Envy, and Ingratitude, to Ease, Quiet, and Love.”<sup>39</sup> と紹介しているし、Adams 牧師も “the Manner in which the People had lived in the Golden Age”<sup>40</sup> と称賛の辞を送っている。*Amelia* の Booth 夫妻も最終的には、“he [Booth] went to London and paid all his debts of honour; after which, and a stay of two days only, he returned into the country, and hath never since been thirty miles from home.”<sup>41</sup> という一節が示しているように、ロンドンには見向きもせず、田舎に戻って静かに暮らすことになっている。つまり、原始的な生活とまではいかないが、ロンドンやパースのような悪の巣食う都会を離れて、田舎で質素に暮らすという設定で小説を終わりにしている。

奢侈についても、立派な家具や絵、衣類などを所有していてもその持ち主が賞められる訳ではない、という主旨のことが述べられている<sup>42</sup> *Joseph Andrews* を始めとして、*Amelia* では、gentleman farmer になった Booth が田舎暮らしをした時に、柄にもなく馬車を購入して近隣の人々の反発をかう場面<sup>43</sup> Booth 夫妻の所有物の中に金の時計や贅沢な小間物類があるのを知った Dr Harrison が、彼らが奢侈に陥っていると勘違いして、Booth を告発した場面<sup>44</sup> などが同類項としてまとめられるであろう。小説の中の一節だけでは確証とならないのなら、*An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers* という論文を参照すればよい。そこで、Fielding

が真っ先に犯罪の原因として糾弾しているのは、奢侈である。

First then, I think, that the vast Torrent of Luxury which of late Years hath poured itself into this Nation, hath greatly contributed to produce, among many others, the Mischief I here complain of. I aim not here to satirize the Great, among whom Luxury is probably rather a moral than a political Evil.<sup>45</sup>

Fielding には独自の論理があって、身分の高い貴人たちは対象から除外している。が、身分の低い者、一般人に対しては、虚栄心を満たすために、あるいは、享楽を追い求めて、奢侈に耽るのは止め、時間を無駄にせず額に汗して働くようにと厳しく説いている。さらに、ロンドンに無数にあるような娯楽は良くないので縮小すべきだと唱えている。

ここまでくると、Fielding 自身が理想としていた生活像がはっきりする。都会ではなく田舎で、奢侈に耽ることなく静かに隠遁生活を送ること—このことが常に Fielding の眼中にあったのではと言い切ってしまうそうである。が、彼の見解も Juvenal のそれと同様、あまり短絡的に処理することができない。例えば、*Tom Jones* の世界の田舎には、Molly Seagrim や Black George のような無分別な Tom をそそのかす人物がいたのだし、また、*Squire Western* の粗野さ、無骨さ、下品さは、紛れもない田舎暮らしの産物と言えよう。従って、Fielding も大枠では質素な田園生活に賛同しながらも、そこに何らかの不快感も感じ、田舎を絶対視はしない姿勢が見受けられる。そして、この姿勢には、Juvenal の原詩で展開されている理想論、道徳論、そして黄金時代への若干の逡巡に通じる所があるのではないだろうか。*Modernization* 以外の作品で、Fielding が理想的な生活像を空間移動によって都会でなく田舎に求めているのに対して、第6諷刺の Juvenal は黄金時代を過去への時間移動によって垣間見ようとしている。この点は確かに異なるが、この作品と離れた所、例えば、第3諷刺などでは Juvenal は田舎と都会を対照させてローマの道徳的墮落に言及している。自然の中での質素



生活を志向するという点が両作家の最大公約数となりうるであろう。その思想の類似性を考慮に入れば、*Modernization* の冒頭部分や結論部分で Fielding が Juvenal の主旨を忠実に受け入れていることは、容易に理解できる。また、彼が何らかの理由で訳出作業を止める時に、原詩の286行目から300行目の途中に着目して、そこに執着したのも無理からぬことであろう。そこを結論にすれば独立した作品に見える場所、結論部分に仕立てるのに最もふさわしい場所として、内容的にある程度まとまっていて、なおかつ自分の最も関心のある部分を Fielding は選んだのである。

## VI

しかしながら、原詩286行目から300行目の途中を結論にし、そこを Juvenal のラテン文学の伝統を踏襲する意味内容にしたため、新たな問題が派生してくる。Henry Knight Miller は、“in the concluding lines of Fielding’s fragment ... there is as sharp change in tone”<sup>46</sup> と、ズバリとこの問題に触れている。Fielding の *Modernization* の結論部分のトーンが他の部分と比べると、大きく異なっているという話である。Miller の発言を手掛かりに、*Modernization* の狙いや、その作品の性質を再考して、このことに言及して本稿を終わることにしたい。

*Modernization* のタイトルからもわかるように、Fielding はバーレスクという形式を用いている。Richmond P. Bond の定義に従えば、バーレスクとは、真面目なテーマを軽妙に茶番風におどけて描いて、その内容と形式の不一致によって笑いが誘発される作品ということになる。<sup>47</sup> この作品での Fielding は、Juvenal のように怒りを起点にして、諷刺を生み出すのではなく、笑いの絶えない喜劇的な作品を目指していた。実際、Samuel Butler 流のヒューデブラス調のリズムにのって、<sup>48</sup> Fielding は50行目（原詩の33行目）を過ぎたあたりから本領を発揮しだす。Theophilus Cibber が妻を寝取られて訴訟を起こした事件や女郎屋の遣手婆の実名、Pamela などを次々と

登場させて、読者の笑いを引こうとしている。原詩の固有名詞を、同時代のエピソード、人名、地名にどんどん置き換えていくことが、Fielding が齎らす笑いの原動力であり、この作品の真骨頂である。が、忘れてはならないことがある。この時の Fielding が決して Juvenal と一体化してはいないということである。原詩の主旨にある程度賛同しながらも、ある一定の距離を保って、それぞれの部分をどのようにモダナイズすれば面白くなるのかを見極めている。Juvenal のような怒れる状況にあると、軽妙に滑稽に見せるにはどこをどう料理しようかということにじっくり取り組む余裕など出てくるはずがない。

ところが、結論部分に至って、Fielding の態度が豹変する。先述したように、Fielding は舞台をエリザベス女王時代の英国に移しているものの、Juvenal の主旨をねじ曲げたり笑わせたりはしていない。いやむしろ、わずかに10行と離れてないところで、“Luxury”や“Virtue”そして“Money”という語を繰り返し用いて、Juvenal の説く教訓を、Juvenal 以上に熱心に説いている。ここでは、バランスよく保ってきた原詩との距離が完全に失われ、Fielding も怒れる人になってしまっている。よって、作品の大部分と、結論部との間にトーンの軋みが生じている。

トーンの違いの生まれてきた過程を推理してみよう。バーレスク形式を追求していくと、原詩の最終行まで同じ調子でモダナイズしていかないと、この作品にピリオドを打つことはできない。最終行まで訳出しても結論のあるしっかりした作品になりそうもない（このことに関しては IV で述べておいた）。また、途中で作業を止めるべき何らかの事情が存在して（II 及び III を参照せよ）、*Modernization* を途中で打ち切ることにしたものの、どこでどう収拾をつけるべきなのか、途方に暮れていたとも考えられる。これが習作段階でのことか、1743年4月に刊行された *Miscellanies* に掲載するための加筆修正段階でのことかは、不明である。が、たぶん大幅な書き換えのなされた後者であろう。締め切りの迫った *Miscellanies* に載せるにふさわし

い、格好の整った独立作品に仕立て上げようと、考えあぐねていたに違いない。そんな矢先に、“Delphin edition”では区切りになってない所に区切りが見つかった。また、幸いなことに、そこで展開されている見解が、元來彼が抱いていた理想、道徳観に非常に近いものだった。それで、思わず、それに跳びついて結論としてしまったのであろう。このにわか仕立ての結論部分は、最後まで作業を続行することなく、*Modernization* を独立した作品に見せるという意味で、Fielding にとっては誠に好都合であったが、作品の大半を支配している滑稽で軽々しい雰囲気損ねるという作品本来の目的を危うくするという難点も齎らした。Fielding のやっつけ仕事が生み出した矛盾と言えるのではないだろうか。

## 注

- 1 Henry Fielding, “Part of *Juvenal's* Sixth Satire, Modernized in BURLESQUE VERSE in *Miscellanies by Henry Fielding, Esq.; Volume One*, ed. Henry Knight Miller (“Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding,” Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1972, pp.84-117. 以後、当作品は *Modernization* と略記し、そこからの引用はその直後の括弧内に行数のみを記す。但し、Juvenal のラテン原詩からの引用には行を表す略記として“v”を用い、Fielding からの引用には“l”を使うことにする。
- 2 *Miscellanies* の序文で、Fielding は以下のように語っている。  
My Modernization of Part of the sixth Satire of *Juvenal*, will, I hope, give no Offence to that Half of our Species, for whom I have the greatest Respect and Tenderness. It was originally sketched out before I was Twenty, and was all the Revenge taken by an injured Lover. (Henry Fielding, p.3.)
- 3 Martin C. Battestin, *Henry Fielding: A Life* (London: Routledge, 1989), pp.49-51. 他に、Wilbur L. Cross, *The History of Henry Fielding* (New Haven: Yale University Press, 1918.), I, 52, F. Holmes Dudden, *Henry Fielding: His Life, Works, and Times* (Oxford: the Clarendon Press, 1952), I, 17-19, Donald Thomas, *Henry Fielding* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1990), pp.41-44 においても同じエピソードが紹介されている。
- 4 Henry Fielding, *Miscellanies*, p.117n.

- 5 Peter Green, "Introduction" to *Juvenal: The Sixteen Satires* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1967), p. 51.
- 6 Dryden の訳し方について、また、"additional bawdy verses" が発見されたことについては、Felicity A. Nussbaum の説明が参考になる。

Juvenal's meaning is always clear in Dryden's translation, and Dryden does not omit references to excretion, regurgitation, and intercourse. Apparently he at one time wrote a number of obscene couplets that were not included in the printed text. W. B. Carnochan discovered the seventeen additional bawdy verses on the recto of the back end-paper in a Huntington Library Copy of a first edition of the poems of Juvenal and Persius. ("*Rara Avis in Terris*; Translations of Juvenal's Sixth Satire" in *The Brink of All We Hate, English Satires on Women 1660-1750* [Lexington, Kentucky: the University Press of Kentucky, 1984], p. 80).

- 7 John Dryden, *The Works of John Dryden*, Gen. ed. H. T. Swedenberg, Jr. (Berkeley, Los Angeles: University of California Press, 1974), IV, p. 173 & p. 175.
- 8 J. N. Adams, *The Latin Sexual Vocabulary* (London: Duckworth, 1982), pp. 100-103.
- 9 Fielding が卑猥な表現をより穏やかな言い回しに改めている部分に相当する五箇所(原詩)を紹介しておく。vv. 60-66 (観劇をしながら淫らなことを想像している女性), v. 190 (ギリシヤ語でベットのを共にする女性), vv. 195-196 (淫らな言葉で陰部が屹立する), vv. 235-236 (陰茎の皮を剥いて女を待つ情夫), v. 253 (セックスの際の男性の喜びの小ささ)。
- 10 *Miscellanies* の序文 (p. 3) で Fielding は次のような女性弁護論を展開している。

For my Part, I am much more inclined to Panegyric on that amiable Sex, which I have always thought treated with a very unjust Severity by ours, who censure them for Faults (if they are truly such) into which we allure and betray them, and of which we ourselves, with an unblamed Licence, enjoy the most delicious Fruits.

- 11 *Tom Jones* 第13巻7章で、Fielding はマスカレードを取り仕切っていた Heydegger を "the great Arbiter Deliciarum, the great High-Priest of Pleasure" と呼んでいる。(The History of Tom Jones: A Foundling ["Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding," Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1975], II, 712.)

12 John Dryden, p. 146.

13 Felicity A. Nussbaum は Dryden 訳の特異性を以下のように述べている。

Though the satire [Juvenal's Sixth Satire] was often translated in the eighteenth century and constantly cited as the prototype of misogyny, no other translation combined Dryden's explicit sexuality with contemporary references and generalizations about the whole sex from the portraits of particular women. (p. 84).

14 *Ibid.*, p. 79. また, Alvin Kernan も *The Cankered Muse: Satire of the English Renaissance* (New Haven: Yale University Press, 1959) において、同様の Juvenal 論を展開している。

The invective is so powerful, the scorn so biting, the lash so vigorously applied, the probing so careful and vindictive, the sense of outrage so apparent, that the satirist is constantly in the position of denying the same ethic by which he is condemning his victim. (p. 75).

15 Juvenal, "SATVRAE" in A. *PERSI FLACCI ET D. IVNI IVVENALIS: SATVRAE* ("Oxford Classical Text," Oxford: Oxford University Press, 1950), p. 39, v. 79. 以後、このテキストを OCT と呼ぶことにする。

16 Seneca, "De Ira" in Vol. I of *Seneca: Moral Essays* ("Loeb Classical Library," London: William Heinemann, 1928), 106.

17 OCT, p. 88, vv. 434-440. Fielding がモダナイズしていない箇所からの引用は OCT に拠る。以後そのような場合には、括弧内の行数の前に OCT と書き記すことにする。

18 例えば, Fielding の劇, *The Mock Doctor* (1732) や *The Miser* (1733) は Molière からの翻案である。

19 Henry Fielding, *Amelia*, ed. Martin C. Battestin ("Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding," Oxford: Clarendon Press, 1983), p. 528.

20 Penelope Wilson, "Classical poetry and the eighteenth-century" in *Books and their Readers in Eighteenth-Century England* ed. Isabel Rivers (Leicester: Leicester University Press, 1982), p. 76.

21 Henry Fielding, *Amelia*, pp. 528-529.

22 Katharine M. Rogers, *The Troublesome Helpmate: A History of Misogyny in Literature* (Seattle: University of Washington Press, 1966), pp. 184-185n.

23 Carolyn D. Williams, "Fielding and Half-learned Ladies" in *Essays in Criticism*, Vol. XXXVIII, January 1988, 33-34.

24 Gilbert Highet, *Juvenal the Satirist: A Study* (Oxford: the Clarendon

Press, 1954), pp. 91-103.

25 Highet, Birt, Vianello, Nägelsbach の説に関しては, Highet, pp. 267-268 を参照した。Anderson 説については, William S. Anderson, "Juvenal 6: A Problem in Structure" in *Classical Philology*, LI, 1956, 73-94 から, Coffey 説については, Michael Coffey, *Roman Satire* (London: Methuen, 1976), pp. 119-146 から, それぞれ引用した。但し, Coffey は大体の意味の切れ目を提示しているだけで, 後述するように, 第6諷刺の構造分析には懐疑的であることを注記しておく。

26 *Miscellanies* の編者 Henry Knight Miller は, この件に関して以下のような註を付している。

Following line 125, most modern editions of Juvenal include a line 126 in their line-numbering, even when they do not include the passage.

The present text follows the numbering of the Delphin edition, which does not include this line. (p. 100n).

27 William S. Anderson, 74.

28 Gilbert Highet, p. 101.

29 Alvin Kernan, p. 73.

30 Michael Coffey, p. 129.

31 Peter Green, p. 48.

32 この問題については, Highet, p. 268, Anderson, 82, Kernan, p. 66, Coffey, p. 127, Green, p. 35, そして, E. Courtney, *A Commentary of the Satires of Juvenal* (London: The Athlone Press, 1980), pp. 24-28 という具合にいずれの研究書も言及している。

33 Livy, *Livy BOOKS I and II* trans. B. O. Foster ("Loeb Classical Library," London: William Heinemann, 1919), p. 7.

34 Gilbert Highet, p. 100n.

35 Cynthia については, *Propertius: Elegies*, trans. G. P. Goold (Loeb Classical Library," London: William Heinemann, 1990) の詩を参照のこと。

36 J. P. V. D. Balsdon, *Roman Women: The History and Habits* (New York: J. Day Co., 1963, Reprinted New York: Barnes & Nobles, 1983), pp. 54-55.

37 William S. Anderson, 75-76.

38 21-22行目のねじ曲げに関して, Fielding は自ら "We have here varied a little from the Original, and put the two Causes of Generation together." という註を付けている。また, 32行目のねじ曲げは, 「Astrea (正義の女神) が Pudicitia (貞潔の女神) を地上から連れ去った。」という原詩を「Astrea が two Sisters

(真理の女神と貞潔の女神)と共に天上へ逃げ去った。」とねじ曲げた。これについては、Miller は「Fielding は Ovid の Dryden 訳を思い出して、故意に誤訳している」と解釈している。いずれも、*Miscellanies*, p. 87n を参照のこと。

- 39 Henry Fielding, *Joseph Andrews* ("Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding," Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1967), p. 224.

40 *Ibid.*, p. 229.

41 Henry Fielding, *Amelia*, p. 532.

42 *Joseph Andrews*, p. 234.

43 *Amelia*, pp. 357-359.

44 *Ibid.*, pp. 148-150.

45 Henry Fielding, *An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers and Related Writings* ed. Malvin R. Zirker ("Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding," Oxford: Clarendon Press, 1988), p. 77.

46 Henry Knight Miller は、*Essays of Fielding's Miscellanies: A Commentary on Volume One* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1961), p. 141. でトーンの変化に関して、次のような分析を加えている。

... in the concluding lines of Fielding's fragment, drawn from Juvenal's attack upon the luxury and mania for foreign ways that he felt were sapping Rome's moral strength, there is a sharp change in tone. The subject is too close to Fielding's own heart for burlesque treatment and we are given instead a straightforward diatribe ... against similar evils in England ....

47 Richmond P. Bond の Burlesque の定義は、"Burlesque consists ... in the use or imitation of serious matter or manner, made amusing by the creation of an incongruity between style and subject," (*English Burlesque Poetry 1700-1750*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1932. Reprinted New York: Russell & Russell, 1964, p. 3) である。

48 Henry Knight Miller, p. 139n.

1991. 9. 30 受理

**Synopsis**

## Reading Fielding's Sixth Satire through Juvenal's

## —A Comparative Study—

Masahiro Minai

Henry Fielding's "Part of Juvenal's Sixth Satire, Modernized in BURLESQUE VERSE" is the eighteenth-century English version of Juvenal's Sixth Satire in the Silver Age of Roman Literature. Something curious about this work consists in the fact that it is not a mere fragment of the original but seems to be independent of it. Fielding stops his modern English version in the middle of 1.299; the Latin original is 661 lines long. According to the Delphin edition of Juvenal, on which he bases his English version of this satire, the middle of 1.299 is not the end of a paragraph. However, Fielding uses a full stop at this point to indicate the independence of this work (in the original, on the facing page, the interruption is emphasized with a dash). Fielding begins by composing his work on the basis of Juvenal's original, and suddenly abandons it halfway. He does ensure that the work appears to be complete. The purpose of this paper is to discuss the mystery of Fielding's *Modernization*.

Fielding himself ascribes his decision to the objectionable obscenity in the lines following the middle of 1.299. His reason, however, can be regarded as his own social stance, so we cannot take it to be necessarily true. Perhaps, the actual reason was either because he thought the remainder of the original to be dull or be-



cause he had a particular aim in mind. Whatever the reason, his choice of that stopping point is significant. So we have only to prove that the middle of 1.299 can be conceived of as an ending point. It is, therefore, worthwhile to examine how to paragraph Juvenal's original in a way different from the Delphin edition. Thus, discovering an orderly structure in the original is the key.

Careful readers will notice that there are two kinds of style in Juvenal's satire: one is characterized by the giving of examples, such as instances criticizing the depravity of Roman women; the other, by the presenting of general statements, with a view toward introducing Juvenal's own sense of morality into his work. Certainly, the former is used for most of the satire and the latter is confined only to two portions: the first twenty lines, and between 1.286 and the middle of 1.300. (Hereafter I will use the term "1.300" to refer to this midway stopping point) Specifically, this latter style is used in the first twenty lines, where the disappearance of *pudicitia* "women's chastity" is described, and the lines between 1.286 and the 1.300 show that the absence of *pudicitia* is caused by *luxuria* "luxury" brought from foreign (eastern) countries. The examples of unchaste women are given between 1.20 and 1.285, and how *luxuria* sweeps over Roman society is portrayed vividly from 1.300 to the end. Oddly, a conclusion is missing. This seems to be the structure of Juvenal's Sixth Satire, although it ought not be forgotten that this is a roughly-established frame; Juvenal often digresses from the point at issue, and too rigid analysis of each example of depraved women will not necessarily show consistence with this proposed structural plan. The point where Fiddling stops his work is, according to this plan, the same as the end of the third paragraph. Moreover, the part between 1.286-300 is the concluding one cor-

responding to the question—how pudicitia flies away to the sky—posed in the first twenty lines. It is safe to say that Fielding makes use of this frame, not that of the Delphin edition, in composing his *Modernization*.

Juvenal represents his own vision of ideal society in the first twenty lines and in 11.286–300. In his opinion, the chastity of people in the Golden Age was based on their life which was lived in natural surroundings and was simple and diligent in spite of attendant poverty. As Rome conquered more and more countries, a surplus of money, bad habits, and corrupt manners assaulted Roman society; luxury was very popular. Juvenal seems to identify the simple Golden Age of myth with the great days of the earlier Roman republic. Fielding also has a view of morality similar to Juvenal's; main characters in his novels finally settle in the country rather than the city, and luxury is postulated as the basic cause of the "increase of robbers." So he faithfully adopts his sense of morality from Juvenal, both in the beginning and in the concluding part of his *Modernization*. He then makes 11.286–300 his own conclusion. The similarity between Juvenal and Fielding in their ideal can be suggested as the reason for Fielding's easy acceptance of Juvenal's idea. He chooses the best place in terms of both structure and meaning to decide to stop his *Modernization*.

Henry Knight Miller accurately pointed out that there is a sharp change of tone in the concluding part of *Modernization*. His reference is strongly related to the characteristic of this work: burlesque. Fielding's original purpose of modernizing seems to have been to make his readers laugh. He introduces into his work contemporary persons, events, and episodes, one after another, to achieve his aim. Fielding's attitude in *Modernization* is quite different from Juvenal's,

because the latter's satires are always composed from the point of view of an angry poet. So the true value of *Modernization* should lie in the way he transforms Juvenal's anger into entertainment. In fact, he seems to translate the original into English faithfully in the beginning, but from 1.50 he makes every effort to make his work amusing. In the concluding paragraph, however, he abruptly becomes a serious preacher. He begins to repeat the words "Virtue," "Money," "Luxury." What Juvenal means in 11.286-300 is too close to Fielding's sense of morality for him to feel free to modernize it in burlesque form. Moreover, his refraining from doing so allows him to put it to practical use as the concluding part of his work, independent of the original. This is why Fielding identifies himself with angry Juvenal and begins to talk furiously about his sense of morality. According to the present writer's proposed plan of structure, Fielding's *Modernization* takes on an appropriate logic.